小池　光　選

左手はパパにつなぎて右手ふる渡るを待つと停めたるわれに　鳥栖市　田中　忠

【評】親子が横断歩道を渡ってくるので、運転している車を停めて、待った。ありがとうとこどもが手を振る。渡る方も、渡られる方も気持ちがいい。小さな出来事のうれしさ。

四十五年結婚生活ただ一度夫に台布巾投げたことあり　町田市　城所レイ子

【評】山あり谷ありの夫婦生活。思い余って夫に台布巾を投げ付けたことがあった。ここが具体的でよい。四十五年で一回きりのふるまい。そのときの記憶がいまに鮮やか。

ジャムの蓋ポンッと開けてパンに塗る今日からリンゴしばらくリンゴ　京都市　足立　紀子

【評】朝食はパン。ジャムつけて食べる。リンゴのジャムを買ったのできょうからしばらくリンゴジャムの生活。妙におもしろい歌。

戦争の反対は平和ではなく「国を守る」と信じてみたい　北九州市　添田　修

結婚のよかったことの一つとして山本って字は書きやすいこと　名古屋市　山本　望

好きだった学生時代の歌を聞く　今さら歳を聞けぬ人には　川崎市　三浦　直子

土門拳木村伊兵衛の写真で見る昭和の子供はみんな仲良し　いわき市　佐川　義成

錆しるきシャッター固く閉ざされて商店街の秋しづかなり　足利市　熊田　敏夫

うっかりかとうとうボケの始まりかどこに止めたかああ我が車　福山市　山野　静江

スマホ買ってもらったからと真つ先に吾に電話をかけ来し男孫　藤枝市　北泊あけみ

栗木　京子　選

青ジソの穂先に白く咲く花の香り零さず素揚げにしたり　鳥取県　小谷真由美

【評】青ジソの葉や実は食材としてなじみ深いが、白い花も食べられる。衣をつけずに素揚げにすれば色彩も楽しめそうである。「香り零さず」の丁寧なしぐさに心を惹かれる。

ことさらに秋の深まり感じたり雁が隊列崩す時など　伊勢原市　山田ゆたか

【評】空を渡る雁。鳴き交わしながら飛んでゆくのであろう。隊列がふと崩れたとき、いっそう鳥たちの存在感が強まり、秋の安らぎと寂しさを感じる。しらべの澄んだ一首。

帰りぎは病みゐる母は長き廊を我が名呼びつつ這ひつつ来たり　羽曳野市　鎌田　武

【評】病院の廊下だろうか。「呼びつつ」「這ひつつ」の「つつ」の繰り返しが胸に痛い。事実のみを描写したところに重みがある。

庭に来し猫たち暑きを乗り切りぬ水舐め帰る涼しき朝　町田市　山本喜多男

一夜干しの烏賊も高価になりたるとぼやきつつ炙る肉の薄きを　稲城市　山口　佳紀

京の街で祭りの山車引く子どもらの数が気になる我は団塊世代　東京都　青山　繁

渾身の力に脱皮せし蟬のぬけがらは葉につきささりをり　宇都宮市　田野辺郁夫

蟷螂が半日かけて卵産む玄関脇の観音竹に　鶴ヶ島市　阿部恵美子

バースデーケーキを乗せて運転する生まれたての君抱いたみたいに　田原市　鈴木恵理子

寒暖にふり廻さるる老とても地下足袋履けば元気百倍　八街市　名取　照子

俵　万智　選

整列をしようとするな言葉たち三十一文字は今は求めぬ　さいたま市　樋口　直子

【評】心が揺れたとき「あ、これ歌になるかも」と思う。それ自体は悪いことではないが、感情より先回りして言葉でまとめようとすることへの自戒がこの歌にはある。まずは心が存分に揺れてから。整列という語が印象深い。

金木犀の匂ひを合図として秋は短距離走のやうに過ぎゆく　千葉市　小金森まき

【評】短い秋のヨーイドンを告げる金木犀の香り。「合図」と「短距離走」が縁語のように響きあって全体をうまくまとめている。

「転勤になったらついて来てくれる？」嫌とこたえるわたしをあいして　姫路市　荷　葉

【評】気持ちを試すような質問。イエスならば愛が深いとでもいうのだろうか。平仮名の下の句は、甘えているようで、鋭い反論だ。

秋風が花をくちびるにしていてうれしい言葉になれそうでした　川崎市　からすまぁ

自転車にカレーを乗せて歩みゆくこぼさぬように君との時間　船橋市　畑　周佑

何にでも句点打ちたい質だけどひとまず読点打って大の字　浜松市　久野　茂樹

体ごと電車の中に置き忘れ降りたい駅が遠ざかる秋　守口市　小杉なんぎん

シュレッダーに掛けたる紙の細片にまだ奴の名が読める夜更けよ　大阪市　原　拓

神無月の上野に狂い咲く桜お前の方がきっと正気だ　船橋市　藤本　典裕

考察はいっさいせずにだまされて最終回でびっくりしたい　上尾市　関根　裕治

黒瀬　珂瀾　選

手術後のまなこに見ればまたしても悲惨な戦禍記す朝刊　久喜市　深沢ふさ江

【評】眼の手術を耐えた後は真っ先に、美しい、楽しいものが見たい。というのに目に入るのは悲惨な戦争の報道。逃れられぬ時代の苦しみを改めて訴える一首です。

久々の古稀の旅路は宣長を偲んで鳴らす鈴ひとつ買ふ　泉佐野市　河合　陽子

【評】松阪市の本居宣長の旧居「鈴屋」を訪ねたのでしょう。かつて宣長は鈴の音に疲れを癒したといいます。小さな音がはるかな歴史の流れを想起させる、旅情豊かな歌です。

出所せし見知らぬ歌友の善き道を人屋に祈る初秋の朝　山形市　ちのは

【評】先の十月二日の長畑氏作への返歌。同じ受刑者として善き道を願うことは、己の更生と悔恨を深く思うことにも繋がるのです。

木犀の香におくられよ谷村新司「昴」は生きて地球をめぐる　常総市　渡辺　守

路地裏でビニール袋が飛んでいる儚き此の世嗤うごとくに　東京都　田中　隆

もみぢ葉を形見と詠みし良寛は涅槃に入りぬ無一物にて　東京都　東　賢三郎

銀の露一木一草月光に輝くものを砲弾に散る　東京都　長田　裕子

色水でハンカチ染めて母を待つオシロイバナの香り懐かし　大阪市　守山　千里

花の咲く植物園に見ておりぬ蜜吸う蝶の器用不器用　伊那市　酒井　夏枝

新蕎麦の「新」は縁起が良ささうに見ゆる秋かな年を食ふほど　静岡市　柴田　和彦

◇投稿規定◇　はがき１枚に未発表の１作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇次回は20日（月）に掲載　右の影絵はしか